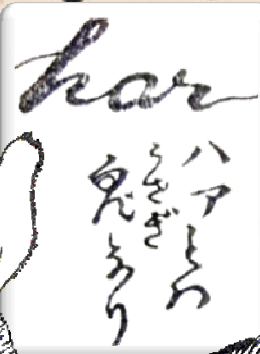


東京外国語大学附属図書館
第11回特別展示



横文字いろは

幕末・明治初期の西洋語紹介

日本人が「はじめて」西洋語に出会った時代。
寺子屋の手習い書を模した「横文字いろは」が異国ブームに乗って世に流行しました。当時の正統的な学習書と比べながら、西洋語を前にした人びとの好奇心と向学心に想いを馳せてみませんか。



2010.11.19fri.-12.22wed. (11/20,21,23を除く)

東京外国語大学附属図書館 2F ギャラリー

ごあいさつ

東京外国語大学附属図書館では、毎年秋に貴重書展示会を行い、当館の所蔵する貴重書の数々をさまざまな切り口から紹介し広く社会に公開しております。

府中キャンパス移転後、特別展示第11回を数える本年は『横文字いろは—幕末・明治初期の西洋語紹介』と題して、当館の誇る1200冊余りの「維新前後外国語図書」コレクションから、日本人が「はじめて」西洋語に出会った時代の西洋語紹介書「横文字いろは」類にスポットを当ててみました。

「横文字いろは」は寺子屋の手習いに使われた「七ついろは」を模していろはを西洋文字で表したもので、当時の異国ブームに乗り世に流行しました。それは学習書というよりむしろ好奇心に訴える性格のものでしたが、学習手段の乏しい時代の中で「横文字いろは」を手に懸命に西洋語を学ぼうと努力した人々もありました。

本展示では、当時の正統的な学習書の系譜と比べながら、西洋語を前にした人々の好奇心と向学心に想いを馳せていただけるなら主催者として喜びに堪えません。

展示にあたり、慶應義塾大学 や ないけ まこと 屋名池 誠 教授（本学非常勤講師）にご指導と解説文を賜りました。また、本学 野本 京子教授から当時の人々の外国観に因んで解説を寄せていただきました。厚くお礼申し上げます。

2010年11月19日

東京外国語大学附属図書館長
立 石 博 高

展示ケース 1

ケース 1～3 に並べられている「横文字いろは」の一群をご覧になって「へえ、昔の人はこんな風に外国語を勉強していたんだ」と思われた方もいらっしゃるかもしれないが、まずお断りしておきたいのは、これらは当時も決して正統的な外国語の入門書・学習書ではなかったことである。

確かに、幕末や明治初期の外国語学習書には、今から見ればかなり奇妙なスタイルのものもあることはある。オランダ語や英語に返り点をつけた「欧文訓読」スタイルなどはその最たるものであろう。しかし、われわれが返り点をつけて怪しむことのない漢文にしても、本来「古典中国語」というれっきとした外国語なのだから、漢文以外に外国語に触れたことがなかった幕末・明治初期の人たちが、新しい外国語に対した時、今までの方法で学ぼうとしたとしても少しも不思議はないのである。

しかし、ここに展示している「横文字いろは」は、日本語のイロハや五十音図をローマナイズしたもののほかはアルファベットやアラビア数字（これも当時は外国の文字だった）、ローマ数字の一覧などを載せているだけで、外国語などほとんど出てこない。これではもともと外国語の勉強などできるものではないのである。

しかし、こうした奇妙な存在にも、それらが生まれてきた時代の必然性があり、それなりの系譜や歴史がある。「へんてこでおもしろい」と済ませて通り過ぎてしまうのではなく、これらが語る「日本人がはじめて外国語に出会った時代の物語」にしばらく耳を傾けてみてはいかがだろうか。

時はまだ鎖国時代、開国半世紀前の 1788 年。『解体新書』で名高い杉田玄白・前野良沢の弟子で、当時の蘭学界の大物、大槻玄沢が、蘭学入門書『蘭學階梯（らんがくかいてい）』（13）を刊行した（ケース 5 参照）。『蘭學階梯』は鎖国時代にあつてはじめておおよかに許可を得て西洋の文字を紹介した書物である（それまでは外国語の文字を掲げただけで処罰されたのである）。これを機に珍し物好きの庶民相手にちょっとした「横文字」ブームがおきた。戯作本や着物の紋（家ごとに定まった定紋とは別に遊びで用いる「風流紋」）などに、「横文字」書きの日本語が出現したのである。そうした流れの中で、当時の寺子屋教科書の一タイプ「七ついろは」の体裁を借りて「横文字」を紹介するものが現れた。展示の『和蘭文字早讀傳受（おらんだもじ はやよみでんじゅ）』（1）がそれである（1814 初刊）。「七ついろは」は文字をはじめて習う子供たち向けに、イロハの各文字をひらがな・カタカナ・万葉仮名（楷書・草書）など七体で示したものである。書名に「早讀伝受」とあるように、「これさえあれば横文字が読める」ということがウリだったのであろうが、当時オランダ語で書かれた文書に接することができた庶民がどれほどいたであろう。また、接することができたとして日本語のローマナイズしか載せていないこの本では、オランダ語を理解することなどできるわけではない。当時あまり流行った様子がないのも当然だろう。

著者の田宮仲宣は蘭学者ではない。実はこの本には種本があるのである。大槻玄沢の蘭学塾では、当時の日本人が意識していなかった母音・子音の別を体得させるため、行・列で子音・母音がほぼ共通して現れる五十音図でローマ字表記を学ばせ、和歌をローマ字書きする練習を繰り返させた後、はじめてオランダ語の学習に入ったという。大槻玄沢の長男玄幹編の『蘭學佩鱗（らんがくはいけい）』は、そのために五十音図でローマ字を示したものだが、その五十音図をイロハに組み替えるという形で改編したのがこの『和蘭文字早讀傳受』だったのである。五十音図は江戸時代の庶民には縁遠い存在で、一般に普及するのは明治になって学校教育に取り入れられてからである。『和蘭文字早讀傳受』はねらいもあやしい俗書であったが、意外なことにその中身は当時としては最先端の知識だったのである。

結局、本書は、後続書を生み出すこともなく、奇をてらった試みというだけで単発で終わってしまった。

展示ケース 2

1859年6月2日、安政五ヶ国（米英蘭仏露）条約の発効により、鎖国日本の門戸が開かれると、条約各国の冒険商人たちが日本に押し寄せた。生糸・茶など、日本の名産の活発な取引がおこなわれたが、この時、日本人商人が自分の名や産地の名称を外国人向けにローマ字で記す必要が生じた。そうした需要にこたえるために生まれてきたのが、『商賈外和通韻便寶（しょうこがいわつういんべんぼう）』（1860）である（「商賈」は商人のこと）。本書は、その後続々としてあらわれる「横文字いろは」の先駆けといえる。英単語もごく少数載ってはいるが、主体のイロハ・五十音のローマナイズはオランダ語式の綴りである。坂本龍馬が作った日本最初の商社「土佐海援隊」が本書の書名を替えただけの翻刻版『和英通韻以呂波便覧』（1868）を出しているが、これも通商用をねらったのだろう。

英語・オランダ語以外の条約国の言語にならったローマナイズのものも出た。『ろしやのいろは』（1861）(10)はキリル文字でロシア語式綴りのローマ字、『横文字早學』（1866）(5)はフランス語式綴りのローマ字を掲げている。後者は文字も美しく、運筆練習を載せているのがめずらしい。これも模倣書が出されている。

□

開国と共に、開港地に集まったのはこうした商人たちばかりではない。好奇心旺盛な庶民は「異人」を一目見たい、「異国」の空気に少しでも触れたいと、開港地見物にわれもわれもと繰り出した。開港地横浜では、異人や開港地風景を描いた「横浜浮世絵」が見物の土産として大いにもてはやされた。

また洋学書生の間では英・米という大国の存在感もあって、英学がブームとなった。

こうした「異国ブーム」に、機を見るに敏な商売人が半世紀前の『和蘭文字早讀傳受』を持ち出し復刊した(1866)が、開国後の当時すでにオランダ語は過去のものになっていたから、もはや時代錯誤以外の何ものでもなかった。

□

『和蘭文字早讀傳受』の「七ついろは」形式を取り入れながら、時代遅れのオランダ語式綴りではなく英語式の綴りで、それも文字の「早読み」などではなく最新流行の「英学」への「捷徑(しょうけい)」「近道」を名乗って出現したのが『英學捷徑 七ツ以呂波』(1868)(6)である。正統派のスペリング・ブック『英語階梯』(14)(ケース5参照)から母音字・子音字一覧のページを取り込んだりして、いかにも「英学」入門書らしい体裁も整えている。しかし、初刊当時の『和蘭文字早讀傳受』の場合とは異なり、『英學捷徑 七ツ以呂波』はこの当時の正統的な外国語学習法(ケース5参照)とは無縁の存在だったから、「英學捷徑」というのは「看板に偽りあり」と言わざるをえない。外国語ブームに便乗して出現した「際物(きわもの)」というほかない存在だが、著者の阿部為任は、二代続いた蘭学者の三代目だったから、古い蘭学式学習法がこの時代にも通用すると素朴に信じていたのかもしれない。

しかし、こうした本書のセールス・ポイントが折からの英学ブームという時好に投じたのであろう、本書自体、発行所を変えながらなんと半世紀後の大正時代まで元の版木のまま発行され続けただけでなく、数多くの模倣書を生み出したのである。



しょうこがいわつういんべんぼう
『商賈外和通韻便寶』 安政7年(1860)序

請求記号 特/57

展示ケース3

『佛學捷徑 七ツ以呂波』(1870)(8)、『独逸 九箇以呂波』(内題は『日耳曼字 九ツ以呂波』)(1871)(9)は『英學捷徑 七ツ以呂波』のローマ字の英語式綴りをそれぞれフラン

ス語式、ドイツ語式（プロイセンとは1861年修好通商条約締結）に置き換えただけの純然たる模倣書であり、『英學捷徑 七ツ以呂波』の大勢の子や孫、曾孫の一員である。

『よこもじいろは』(3)『西洋 五體伊呂波』(7)も、いろはのローマ字綴りのうち活字体は『英學捷徑 七ツ以呂波』から引き写した英語式である。しかし、筆記体の方は箕作元甫(みつくり げんぼ)編のオランダ語単語集『改正増補蛮語箋』(1857)あたりからもってきたオランダ語式綴りというハイブリッドなのである。『英學捷徑 七ツ以呂波』にも筆記体のローマ字はあるのに、なぜこんな手間をかけたのかはわからないが、当時の、英語もオランダ語もない「横文字」というもののありかたや、本屋が際物の本をいかにしてでっちあげていったかがよくわかるという点でおもしろい。

こうした模倣書では、ローマ字の【子音字+母音字】を仮名相当の1文字と誤解していたきらいがあり、そのため、ローマ字の【子音字+母音字】を単位として、日本の文字と同様に縦書きすることがあった。『よこもじいろは』の表紙はその典型的な例である。『英學捷徑 七ツ以呂波』の末流が際物出版物であったことは、その流通形態からもわかる。江戸時代から明治初期にかけて、書籍には2種の流通経路があった。学術書や宗教書のような格の高い書籍は「書物」と呼ばれ、「書物問屋」のルートで流通したのに対し、戯作本や子供の本などは浮世絵とともに「地本(じほん)」「地元の本」の意味。もともとは、江戸時代前半に当時文化の先進地域であった上方の本に対し、江戸出版の本を卑下して呼んだ名称)と呼ばれ、「地本草紙問屋」のルートで売られたのである。前者は現在の奥付にあたる「刊記」があるのに対し、後者にはそうしたものがないが、月番行事によって出版前に業界内検閲が行われており、検閲済みの証拠である「改印(あらためいん)」を版面に刻むことになっていた。幕末・明治初期には改印は年・月ごとに異なるものが用いられたので、それを見ることで刊記がなくても発行年月を知ることができる。では、こうした際物がみない加減なものであったのかといえ、必ずしもそうとはいえない。「横文字いろは」は多数出版されたが、そのほとんどは模倣書にすぎず、オリジナルはごく少数にすぎない。しかし、そうしたオリジナルなものは、外国語を学んだ正統派の手になったものなのである。たとえば、『英學捷徑 七ツ以呂波』の英語式綴りのローマ字をフランス語式綴りに替えて『佛學捷徑 七ツ以呂波』を出した橋爪貫一は、旗本出身で我が国最初期の新聞を発行したりした洋学系啓蒙家であった。日本人が正確な欧米語の発音に接する機会の乏しかった当時、それぞれの言語での発音と綴りの対応関係を把握すること自体困難を極めたのだから、さらに、その対応関係を逆転させて日本語の音をローマ字表記することはだれでもできることではなかったのである。

□

ここに展示された「横文字いろは」はどれもみなくたびれ汚れ果てており、東京外国語大学附属図書館の誇る貴重書などとはとても見えない。これは本図書館の蔵書に限ったことではなく、各地の図書館に残されている「横文字いろは」類もみなそうなのである。元の持ち主の書き入れが残っているものも多い。先にも述べたように「横文字いろは」の内容はとてこれだけで外国語が学べるようなものではないのに、多くの人が「横文字いろは」を手にも外国語を学ぼうとしたのである。近代の日本を顧みると、正規の

学校で高等教育まで受けることのできたのは恵まれた境遇のごく少数の人たちに限られていた。強い向学心は持ちながらも、そうした境遇に身を置くことができなかつた人たちには独学の道しかなかつたのだが、適切な指導者のいない独学には、不運にもこのような怪しげな本に出会ってしまう危険が常にあつたのだ。「横文字いろは」の汚れや書き込みはそうした人たちの傷ましい努力の痕跡なのである。しかし、そうした努力は無益に終わったものばかりではないだろう。恵まれない境遇のなかでも向学心を失わず、真摯に努めた無名の先人たちの隠れた努力が近代日本の発展を支えてくれたことを、勉学の機会に恵まれた今日のわれわれも決して忘れてはならないだろう。

□

『横文字百人一首』(1873) (11)は外国語学習とはまったく無関係という点で、特異な存在である。母音と子音とを書き分けられるローマ字の特性を利用して、五十音図では区別されているが当時の発音で区別のなかつた『お』『を』の音『い』『る』の音の差別を知らしめ(凡例)んがため和歌を表記して見せたものである。本文は歴史的仮名遣いの忠実な翻字である。五十音図を絶対視し、その枠の数だけ音韻があるはずだと考えるのは近世末期の国学の特徴だが、その国粹主義的な主張のために、欧米由来のローマ字を用いるというのは、新旧両思潮が入り交じつた明治初期ならではの試みであつたといえる。

展示ケース 5・6

正統派の外国語の初級学習書は、外国語を学ぶ機会に恵まれた、当時であつてはごく少数のエリートのものという意味で、今まで見てきた「横文字いろは」とは対蹠的な位置にある。

蘭学時代最初の入門書『蘭學階梯』(13)とその時代の初級の教授法についてはすでに述べた。その後、幕末の後期蘭学、初期英学の時代になると、外国語の初級教授法は、文法書の原典を句読を授けて音読させることから入ることが一般的になつた。

開港後の1866年頃からはさらに一転し、欧米の最新の教授法にならつてスペリング・ブックやペンマンシップがもちいられるようになった。この時期の代表的なスペリング・ブックは、英米のスペリング・ブックを日本で改編したと見られる『英語階梯』(14)・『英學入門』と、米国書の輸入ないし日本での翻刻書として行われたウェブスター Noah Webster の *The Elementary Spelling Book* (17)である。

『英語階梯』(1866)は、幕府の洋学校、開成所(東大の前身の一つ)で編纂・発行されたものである。日本語を交えない純然たる spelling book で、リンドレー・マレー Lindley Murray のスペリング・ブックを抄出したものであることがわかっている。開成所だけでなく、明治に入ってから多くの学校でテキストとして用いられた。

『英學入門』(1869)は神奈川県立の修文館のテキストとして、当時神奈川県で

あった石川 彝（いしかわ つね）が編纂したスペリング・ブックだが、原拠となった本はいまだ不明である。これも修文館以外の学校でもテキストとして用いられた。（附属図書館注：展示資料はその自習書 石川 彝『通俗英學入門』（1871）（15）。）

The Elementary Spelling Book は、辞書で有名なウェブスター編のスペリング・ブックでもっとも広く用いられた。人気は明治 20 年代になっても衰えず、1887 年には上半期だけでも 17 種の翻刻版が発行されている。展示のものは 1886 年の翻刻版である。写真製版などない時代、活字は全部日本で新組みしたものだが、原版なみの精緻な仕上がりに驚かされる。

□

上記 3 種類のテキストには、すべてそれと対応する自習書がある。スペリング・ブックに自習書があるというのも不思議なものだが、綴りに発音を注記したり、例文に訳を付けたりしたものである。ウェブスターの自習書を三種展示してあるが、このうち、『スペルリングブック直訳』（20）はウェブスターの自習書としてはもっとも早いものである。テキストと併用することを前提に、例文の直訳だけしか載せておらず、日本語のみの英語学習書という不思議な存在である。他の自習書と異なり、綴りの発音を示していないのは、これが英米人に英語を学ぶ人のためのもの（綴りの発音は英米人から直接聞けるから載せる必要はなく、英米人は日本語訳が不得意なのでこれはこの本で示す）という、当時あってはきわめて特殊な学習環境を前提としたものだったからである。

□

英語のスペリング・ブックは本来、英語を母語とする子供が文字の綴りを覚えるためのものである。すでに知っている語の発音を文字の綴りと対応させることを学ぶためのもので、ウェブスターのスペリング・ブックには同じ文字でも発音が異なるものを識別できるように発音区別記号 diacritic が付けられ、冒頭にはその説明もある。しかし、当時、日本人学習者の多くは英米人に直接接する機会ほとんどなかったから、その発音からしてまずわからない。そうした中で、英語の発音を懇切丁寧に解説した当時唯一の存在が『英音論』（1872）（16）である。日本人に英語の発音を説明するためには、日本語とどこがどう違うかを示さなければならない。しかし、当時、音声学は欧米でも発達途上の段階だったから、日本語の発音をきちんと捉えること自体がまずむずかしかったのである。『英音論』はごく早い時期の日本語の音声観察の成果としても意味をもつものといえる。著者のダラスは、米沢藩（のち統合して山形県）の藩校、興讓館で教鞭をとっていた人物で、赴任地の方言を観察してまとめた「米沢方言」も日本方言の研究論文の嚆矢として著名である。

（慶應義塾大学教授 や ないけ まこと 屋名池 誠）

「萬国人物之図」について



『萬国人物之図』 請求記号 特/260

本学図書館の所蔵する「萬国人物之図」は、江戸時代末期に長崎栄寿堂から刊行されたものであり、木版色刷りの世界図に人物図を配するという構図になっている。この図が収録されている織田武夫・室賀信夫・海野一隆編『日本古地図大成 世界図編』（講談社、1975年）によれば、他の地図との関係性（影響関係）を考慮すると、1850年以降に刊行されたものと考えてまず間違いないという。幕末の黒船来航は、おそらく一般庶民にとっても「世界」を意識する大きな契機になったと思われる。この『萬国人物之図』は、同書では「幕末民衆の世界図」に分類されており、当時の庶民のための普及版的地図といってよい。

□

近世のはじめに日本に伝えられた世界図には、ヨーロッパから直接もたらされたもののほかに、中国でキリスト教を布教していた宣教師たちが作成した地図があった。それらは地名も注記もすべて漢字で書かれている点に特徴があり、その代表的なものとして

イタリア人マテオ・リッチが1602年に刊行した「坤輿萬国全図」がある。同図は日本に伝えられ、多くの模写図を生んだとされる。正保2年（1645）頃に刊行された「萬国総図」は、日本で最初の版刻世界図であったが、これも図形はマテオ・リッチの地図に拠っていた。ただし地名は西洋の世界図から和訳された仮名書きになっていたため、よりわかりやすいものであったという。18世紀になるとマテオ・リッチの原図に改訂を加えた図なども刊行されはじめるが、リッチ図に特徴的な巨大な南方大陸の形は依然として保持されており、当時、オランダから伝えられた新しい世界地図に比べると、正確さを欠くものであった。18世紀末には長久保赤水によってマテオ・リッチ系の世界図が刊行され、かなり民間に流布したとされる。これは地名の大部分はリッチ系だが、一部、魯齊亜や赤エゾなどのように、リッチ図にはなかった地名、つまり当時の日本が得た知見が記されている点に特徴があるという（『日本古地図大成 世界図編』 p.136）。

□

「萬国人物之図」をみると、経線を省略した長久保赤水系世界図の特徴を示すとともに、巨大な南方大陸（墨瓦臘泥伽）が目をひく。「大日本六十余州」を中心に、南北亜墨利伽、亜細亜、欧邏巴、利未亜（アフリカ）が描かれている。興味深いのは、右上の文字を読むと「萬国土地の善悪」として、正帯・暖帯・寒帯に区分されていることである。正帯が最上位におかれ、「陰陽中和」の地であり、春夏秋冬とも五穀がよく実り、「人物才智聖賢」とされている。この「善地」にあるとされているのが日本と唐土（清国）、天竺（インド）および「紅毛」（ヨーロッパ）である。右下には「南北アメリカは大国で、一千六百余州ある。この地に住む人々はほかの国より背が高く、色が白くて美しい。男性はみな身体にほりものをしており、その模様は唐草や龍といったものである。南へ行くほど背が高くなり、南アメリカの果てに長人国がある」といったことが記されている。左上には六大州（南北亜墨利伽、亜細亜、欧邏巴、利未亜、墨瓦臘泥伽）と四大海（大東洋、小東洋、小西洋、大東洋）の説明が付されている。

また、この図でとりわけ面白いのは、下部の16カ国人物図である。これには日本からの各国の距離も書かれている。人物の風体（衣服や髪型等）も目を引くが、実在する国々だけではなく、南長人国や女人国、小人国といった架空の国々が混在している点が興味深い。刊行する側が大衆受けをねらったという側面もあろうが、日本からの距離や南北アメリカの説明も含め、虚実とりまぜた世界図になっている。いずれにせよ、幕末の民衆の世界観をうかがうことができる大変貴重な史料であることは間違いない。

（東京外国語大学教授 野本 京子）

展示資料一覧

資料名	請求記号
ケース 1	
1. 『和蘭文字早讀傳受』 <small>おらんだも じはやよみでんじゅ</small> 田宮 仲宣 慶応2年(1866)	特/176
2. 『西洋文字稚繪解』 <small>せいようも じおさなえとき</small> 明治4年3月改印(1871)	特/629
ケース 2	
3. 『よこもじいろは』 刊年未詳	特/72
4. 『和訓漢語辨(明治改正七ツ伊呂波)』 <small>わくんかんごべん めいじかいせいななついろは</small> 刊年未詳	特/102
5. 『横文字早學』 <small>よこも じはやまなび</small> 慶応2年(1866)	特/488
6. 『英學捷徑七ツ以呂波』 <small>えいがくしょうけいななついろは</small> 阿部 為任 刊年未詳	特/91
7. 『西洋五體伊呂波』 <small>せいようごたいいろは</small> ホーパツピーツル 刊年未詳	特/76
ケース 3	
8. 『佛學捷徑七ツ以呂波』 <small>ふつがくしょうけいななついろは</small> 橋爪 貫一 明治3年(1870)	特/170
9. 『独逸九箇以呂波』 <small>どいつこのついろは</small> 柳垣 榮信 明治4年(1871)	特/456
10. 『ろしやのいろは(模刻)』 <small>もこく</small> H. Maxoba 大正14年(1925)	特/281
11. 『横文字百人一首』 <small>よこも じひやくにんいつしゅ くろかわ まより</small> 黒川 真頼 明治6年(1873)	特/452
ケース 4	
12. 『横文字運筆自在』 <small>よこも じうんびつじざい よしだ つねのり</small> 吉田 庸徳 明治6年(1873)	特/193
ケース 5	
13. 『蘭學階梯』 <small>らんがくかいてい おおつき げんたく</small> 大槻 玄沢 天明8年(1788)	特/168
14. 『英語階梯』 <small>えいごかいてい</small> 慶応2年(1866)	特/146

つうぞくえいがくにゆうもん いしかわ つね
15. 『通俗英學入門』 石川 彝 明治4年(1871) 特/497

えいおんろん
16. 『英音論』 ダラス著 吉尾 和一訳 明治5年(1872) 特/100

ケース6

17. 『The Elementary Spelling Book』 N.Webster 明治19年(1886) 特/762-4

ひとりまな
18. 『ウェブストル氏スペルリング 獨學び』 明治17年(1884) 特/763

ひとりあんない
19. 『ウェブストル氏スペルリング 獨案内』 明治18年(1885) 特/764

ちよくやく
20. 『スペリングブック 直譯』 川村 敬三 明治4年(1871) 特/503

ケース7

21. (繪本童子英語早わかり) 明治19年(1886) 特/29

えいごずかい クワッケンボス
22. 『英語圖解』 福田熊次郎画、格賢勃斯著 明治20年(1887) 特/532
